

＜今日の説教のポイント 使徒言行録1章12～26節＞

聖霊降臨まで待った弟子たち。その待った間の持つ意味を考える。

1 教会の原型は、すでにこの時(聖霊降臨前)に出来上がっている?!

使徒たちは主から言われた通り、エルサレムで聖霊が降るのを待ちました。どのように待ったのかというと、まず、共に一つ所に集まり、「心を合わせて熱心に祈っていた」(14)のです。ルカは特に、当時のユダヤ社会では考えられない、女性も共に、という点を挙げています。礼拝共同体とも言われる教会の原型がここにあると言えます。ただ集まって仲良くするのではなく、主を見上げ、主の教えを実行し、主に喜ばれる姿を取ろうとする者たちの共同体を作る取り組みが、すでにこの時から始まっていたのです。次に取り組んだことからこのことは言えます。

2 なぜユダの欠けを補おうとしたのか? もう神の国を生き始めている!

ペトロは12使徒の一人ユダが欠けた穴を埋めようと提案します。群れ全体もそのことに賛同し、皆で真剣にマティアを選び出します。なぜでしょうか? ルカの記事では、「(ユダが)同じ任務を割り当てられていた」(17)、「使徒としてのこの任務を継がせるためです」(25)と、「任務」ということが強調されています。また、「イエス様の宣教開始から昇天まで一緒にいた者であり、主の復活の証人である」(21-22)ことが求められています。よって、その任務とは、「主イエスの救いの意味と主イエスの教えを伝えること」(マタイ 28:19-20)であり、それにはマティアが一番ふさわしかったのでしょう。しかし、この後、マティアは聖書に一度も出て来ませんし、主の復活に立ち会った使徒たちもいずれは皆死にます。それでいいのです、なぜなら、「主イエスの救いの意味」と「主イエスの教え」は、使徒から弟子たちに、弟子たちからさらに他の人々に伝えられて行く「福音の伝道のループ」が回り出すことが大事なことからです。ペトロも他の弟子たちもこだわったユダの欠けを補うという行為は、神様から託された全ての民への福音伝道の任務にお仕えするという思いの表れであり(ルカ 22:30)、「聖霊降臨が起こる前に前もって行っておこう」と弟子たちががなした点である点が重要だと思います。弟子たちはもう神の支配(バシレイア：国)の下にあることを覚えながら生き始めているのです。今、私たちも同じ主の支配の下にあるのです!